



能登半島地震支援センター

能登半島地震被災地の支援拠点として宗派が金沢市に設置する能登半島地震支援センター（以下「支援センター」）は、ボランティアを受け入れて、支援物資の搬送、被災した寺院や門徒宅の片付け作業（写真）、炊き出しなどを続けている。高齢者だけで暮らす世帯が多く、片付けがままならない地域も多い。ボランティアの支援を受けた高齢門徒からは「自分たちだけではどうすることもできなかった。若い人たちが応援に来てくれて助かった」と感謝の言葉がもれていた。

石川県七尾市三室町の山ランティアは作業前、「処口忠明さん（76）、同町・蓮分するものでも、ご家族に照寺門徒）は、自宅が大規模半壊という大きな被害を受けた。妻の百々子さん（72）との2人暮らしだったが、地震後は津幡町の娘夫婦のもとに身を寄せている。時折、山口さんが自宅に戻り、片付けを続けているが、重い物の運び出しなどはできていなかった。同寺の河野誠住職から紹介を受け、支援センターにボランティアをお願いした。

4月11日に支援センターから6人が駆けつけ、運び出し作業などを行った。ポ

ランティアは作業前、「処分するものでも、ご家族にとっては大切な品々かもしれない。大切に」と申し合わせた。山口さんがコッソと仕分けしていた災害ゴミをはじめ、冷蔵庫など大型ゴミを軽トラックに積み込み、仮置き場へと搬送した。

黙々と作業するボランティアの姿を見守りながら山口さんは「若い人がこうして応援に来てくれたのは本当にありがたい。周辺には同じような状態の民家も少なくない。引き続き、支援をお願いできれば」と話す。

災害義援金の送付先は6面

「不安の方々 置き去りにしないように」 高齢者だけの世帯多い地域で搬出作業、炊き出しなど続ける

門徒宅でのボランティア活動と並行し、被災寺院での活動も続ける。当初は倒壊した鐘楼の解体、崩れ落ちた本堂や庫裏などの屋根瓦の処理、倒壊したフロック塀の解体などを行ってきたが、現在は災害ゴミの搬出や本堂の片付け作業を中心にしている。

また、被災地での炊き出しも継続している。4月29日には「笑顔交流」と銘打って七尾市能登島への目町の集会所で炊き出しを実施した。交流会が開かれることを聞き、金沢市などに避難している人たちも一時帰宅して参加するなど、同町・浄尊寺（勝尾考住職）の門徒を中心に150人が集った。久しぶりの再会に、「元気でやっているか」と笑顔がこぼれ、互いの現状を聞き合っていた。支援センターのコーディネーター・篠原法樹さんは「炊き出しは命をつなぐという意味だけでなく、地域住民の方たちの絆を再確認する場としても重要」と話す。

支援センターのボランティア登録者数は5月21日現在233人で、活動従事者数は延べ1133人。僧侶や門信徒、宗門校の龍谷大学や筑紫学園大学の学生などのほか、全国的美容院経営者や美容師でつくるNPO法人ウッディキッズなど一般の人たちも支援センターを通じて活動を行っている。

川井周裕支援センター長は「被災されたご門徒は高齢者だけの世帯が多く、『今後どうしたらいいかわからない』と不安を募らせておられる。こうした方々を置き去りにしないためにも息の長い活動が必要になる。一人でも多くの方にボランティアに参加してもらいたい」と呼びかけている。